

批評と紹介

ソヴェエト連邦科学アカデミーア
 ジア諸民族研究所（レニングラー
 ド支所）における東洋学研究

護 雅 夫

わたしは、一九六五年に成立した日ソ間の学者交換計画に基ずく最初の交換学者三名のうちの一人として、一九六六年三月一二日からほぼ二ヶ月のあいだ、ソヴェエト連邦に滞在した。全ソ高等教育省からの指示では、わたしは、二ヶ月間、ソ連科学アカデミーアジア諸民族研究所レニングラー支所（Ленинградское отделение Института народов Азии Академии наук СССР、以下、Ю ИНА АН СССР と略称する）と、ジュダノフ名称国立レニングラード大学東洋学部とに滞在して、「視察・講義・討論に従事し」、その間に、アゼルバイジャン共和国のバクー、ウズベク共和国のタシュケントへの旅行が可能である、ということであつた。わたしはそれで、三月一五日から四月一九日までの一ヶ月余りをレニングラードで過ごし、あと一ヶ月足らずを、バクー、タシュケントをは

じめとする中央アジアへの旅行、モスクワの訪問にあてた。

わたしがソ連で訪れた研究機関、大学は、上にあげた二つのほかに、つぎのものである。レニングラードでは、ソ連科学アカデミー言語学研究所レニングラード支所の北方諸民族語部門、科学アカデミー人類学・民族学研究所、エルミタージュ博物館研究部極東科、ソ連内諸民族博物館研究部、アゼルバイジャン共和国では、同共和国科学アカデミー言語・文学研究所、同東洋学研究所、キエフ名称国立バクー大学言語学部、ウズベク共和国では、同共和国科学アカデミー言語・文学研究所、同歴史学研究所、レーニン名称国立タシュケント大学東洋学部、モスクワでは、ソ連科学アカデミーアジア諸民族研究所、ロモノソフ名称国立モスクワ大学東洋語学院、——これらである。ウズベク共和国で、同共和国科学アカデミー東洋学研究所を是非訪問したかつたのであるが、わたしがタシュケントに到着した日におこつた地震、および、その後の連日の余震のため、それが果せなかつたのはかえすがえすも残念であつた。

本稿では、Ю ИНА АН СССР について、わたしが知りえたところをのべることにするが、ソ連では、ここにかぎらず、一般に、一目でその沿革・機構そのほかがわかるような、いわば「要覽」に類するものを、常時そなえているところはすくないようであつて、以下に記するところも、わたし

が折りに触れて、研究員そのほかから聞き書きした覚え書き、およびわたしが直接調査した結果に基づいている。以下の叙述が、同研究所の全般に関するものでなく、とくにわたしがよく訪れたチュルクーモンゴル部門一研究室については比較的詳しく、他に関しては簡単に、繁簡よろしきをえていないのはこのためである。また、聞き書きした点を、ほかの資料によつて確認するように、できるだけ努めたけれども、それが不可能なことも多かつた。わたしに語つてくれた人々の名前は一々註記しておいたが、それをまとめた責任がわたしに在ることはいうまでもない。今後、折りがあれば、追加、補正することを約束するとともに、以上の点について御諒承をいただければ幸である。

沿革⁽³⁾ Ю ИНА АН СССР の前身は、一九一八年に創設されたアジア博物館 (Азиатский Музей) に在る。一九一七—三〇年のあいだに、科学アカデミーに附属する東洋学関係の研究機関としては、(一)東洋学者協議会 (Коллегия востоковедов)、(二)仏教文化研究所 (Институт буддийской культуры [ИНБУК]), (三)トルコ学研究室 (Туркологический кабинет [ТУРК]) の三つがあつて、これらは、一九一八年以後は、上述のアジア博物館と密接な関係を保つていた。

このアジア博物館は、一九三〇年に、ソ連科学アカデミー

東洋学研究所 (Институт востоковедения АН СССР) に編成がえされ、そのさい、上にあげた三つの研究機関は、この東洋学研究所に統合された。ところが、一九五〇年に、東洋学研究所の本部は、モスクワに移されて、研究の重点が、アジア諸民族の近・現代における言語・文学・歴史、とくに社会経済史におかれるにいたつた。⁽⁴⁾ 太平洋研究所 (Тихоокеанский институт) が東洋学研究所に統合されたのも、このときのことである。これに伴つて、そののち、列宁グラードの東洋学研究所はモスクワに本部を置くその支所となつた。ついで、一九六〇年、東洋学研究所が分裂して、アジア諸民族研究所とアフリカ研究所 (Институт Африки) とになつたため、東洋学研究所列宁グラード支所は、アジア諸民族研究所列宁グラード支所となつて、今日におよんでいる。

特色 このように、Ю ИНА АН СССР は、モスクワのその本部とともに、アジア諸民族研究所としては、その歴史は浅い。⁽⁵⁾ しかし、アジア博物館時代から数えると、その創設以来はほぼ半世紀になり、これが、ソ連におけるもつとも古く、また重要な東洋学研究機関の一つであることは疑えない。この図書館の蔵書は、アジア博物館から引き継いだものを基本としているが、そのほかに、ここには、ならに古く、Библиотека一世の「クンストーカメラ (Кунсткамера) (美術・骨

とう品の蒐集・陳列室」にその源流をもつ、多くの写本・文書が蔵せられてゐる。Ю ИНА АН СССР の特長は、¹⁾これらの写本・文書に在るのであつて、その主な仕事も、これらを基本的資料とする研究、これらの翻訳、複製、刊行にある。そうだとすれば、ここの研究が、アジア諸民族の古代・中世の言語・文学・歴史を主な対象としてゐるであろうことは、ほぼ推察できる。現状はまさにその通りなのであつて、この点で、モスクワの本部が、同じくアジア諸民族の言語・文学・歴史を研究対象とするとはいへ、その重点が、むしろ、近・現代におけるそれにかかつてゐるのと対照的である。ただし、これは、それぞれの研究の中心が、どちらに置かれてゐるかといへば、こゝにいえる、というまでであつて、レニングラード支所が近・現代の研究を、モスクワの本部が古代・中世のそれを、全く排除してゐる、という意味では全くない。念のため。

しかし、レニングラード支所の特色は、上にも触れたように、何といつても、その膨大な量の写本・古文書に在る。したがつて、この研究所全体の、今日ただ今における最大の目標が、これらを一日も早く万人の使用に堪えようようにすること、まず、その第一階梯として、これらの目録を作成することにおかれてゐるのは、当然といえる。われわれが最近見ることを得たモンゴル語・満洲語・中世ウイグル語・タジク語・

ペルシア語・日本語・中国語の写本の目録などは、何れも、その成果の一端にはかならない。

構成。この研究所には、所長、副所長のしたに、大きく分けて、研究部、事務部、写本保存室 (Хранилище рукописей)、²⁾ 東洋学者アルヒーフ (Архив востоковедов)、³⁾ 図書館があり、そのほか、党事務局 (Партийно) 地区委員会 (Местком) の部屋も設けられてゐる。

所長はペトロシヤン (Петросян Ю.А.)、副所長はクイチヤノフ (Кучанов Е.И.) である。

ペトロシヤンはオスマントルコ、とくにその、一九一—〇世紀の歴史、イェニ—オスマンルラル、大学・教育史の研究者として知られる少壮学者で、本年三六歳という。アルメニア人で、トルコ語を良くし、わたしはかれとは専らトルコ語で話したが、そのほか、かれは、少なくとも四、五ヶ国語は自由に繰る、ということであつた。東洋文庫にはとくに好意をしめしてくれ、複教授を通じてわれわれが要請したのに応じて、ラドロフ (Radloff W.)、マローフ (Maros C.E.) の解説、発表した古代ウイグル語法律文書——Ю ИНА АН СССР 所蔵の——のマイクロフィルムを早速送るよう手に配してくれたが、そのほか、如何なる要求であろうと、それに副うよう、出来るだけの努力をする、と約束してくれた。

タイチャノフは、我が国でもよく知られている西夏文書・文字の研究者で、これは三四歳。非常な勉強家で、図書館の閲覧室が開いているかぎり、かれの姿の見えぬ日とてなく、何時でも、大きいカードボックスを前に、研究にうちこんでいた。日本の西夏・タングート研究に大きい関心をもち、西田竜雄・岡崎精郎・山本澄子諸氏の業績によく通じていた。

この研究部で研究に従事するのは、全部で約一四〇名を数えるが、このなかには、正式の研究員のほかに、ソヴィエト連邦の各地の大学を卒業し、アスピラント (аспирант、日本の旧制大学院学生にあたる) として研究するものもふくまれている。

研究部の構成はつぎの通りであるという。(A)極東部門——これは、(a)中国、(b)日本、(c)西夏、(d)チベット、(e)朝鮮、(f)満洲に分かれる。(B)チュルク・モンゴル部門、(C)アラビア部門、(D)イラン部門、(E)古代オリエント部門——これは、(a)言語と(b)歴史とに分かれる。(F)中近東部門、(G)カフカス部門、(H)クルド部門、(I)インド部門。このうち、極東部門が最大で、ここで研究するものは、三〇名にのぼっている。

わたしは、これらのなかで、チュルク・モンゴル部門——研究室に多く出入りしていたので、つぎに、まずこれについて述べ、ついで、その他の研究部門で、わたしの会うことので

きた研究者たちに触れることにする。

チュルク・モンゴル研究室 (Тюрко-монгольский кабинет)。アジア諸民族研究所の前身、東洋学研究所でのチュルク学の研究は、トルコ研究室 (Турецкий кабинет) と中央アジア研究室 (Среднеазиатский кабинет) とで行なわれていたが、このうちのトルコ研究室を主体として、一九五七年に、チュルク・モンゴル研究室が設けられた。その室長は、クリャシュトルヌイ (Кляшторный С. П.) である。

かれは、故ヘルンシュタム (Гернштам А. Н.) の弟子で、パミール・フェルガーナ・天山地方・セミレチュ・トワルク・メニヤなどの調査・発掘団 (一九四七—六五年) に加わったわら、とくに古代チュルク語碑文から見た、突厥・古代キルギス・ウイグル史の研究に従事し、一九六四年に、「中央アジア史の史料としての、古代チュルク・トルン文字碑文」を出版した。現在はその続編として、同じく古代チュルク語碑文を主要史料とする、古代チュルク文化史を執筆するとともに、バルトリド全集の第五巻の編集を担当している。そのほか、かれは、後でも触れるように、シチュルバク (Шедар А. М. ソ連科学アカデミー言語学研究所レニングラード支所)、チュニシユフ (Тенишев В. П. 同モスクワ本部)、バトマンフ (Багманов И. А. フルンデ) とともに、「トルン文字

チュルク語碑文大系」の編纂を計画中であるとのことであった。三七歳の少壮学者で、レニングラード大学東洋学部チュルク語学科 (Кафедра тюркской диалектики) の兼任講師を以て、**「古代チュルク語碑文の歴史学的研究」**について講義している。

チュルク・モンゴル部門—研究室の研究員は、つぎの通りである。

コノフ (Конов А.Н.)—ソ連科学アカデミー準会員。チュルク語比較文法、古代チュルク語、ウズベク語の研究。レニングラード大学東洋学部チュルク語学科の主任教授を兼任し、キェルティギン・トニユクク両碑文について講義していた。わたしはかれの講義に出席し、若干の語について、その歴史的意義を説明した。本年六〇歳で、その祝賀論文集が、近く出版されることになっているという。ムギノフ (Мугинов А.М.)—東トルキスタン近世史、中・近世ウイグル語写本の研究、その目録作成。ムラトフ (Муратов С.Н.)—バシキル語の研究、中・近世ウイグル語写本の研究、その目録作成。メドヴェヂェヴァ (Медведева Л.В.)—チュルク語写本の研究、その目録作成。ダミトリヒェヴァ (Дмитриева Л.В.)—同上。トゥグシヒェヴァ (Тугшева Л.Ю.)—一九六五年まで、言語学研究所レニングラード支所に在籍。古代チュルク語、ウイグル語の研究。シチェルバク、チェロシヒ

フ、ナスィーロフ (Насилов Л.М. 突厥語・ウイグル語の研究で知られたナスィーロフ [Насилов В.М. モスクワ大学東洋語学院] の甥、言語学研究所レニングラード支所)、ナヂェリヤエフ (Надеждин В.М. 言語学研究所レニングラード支所) などとともに、古代チュルク語辞典の編纂に従事。これは脱稿寸前にあり、一九六七年に出版の予定。グーゼフ (Гусев В.Г.)—チュルク語方言、とくにその音韻の研究。コノフ、および後述のドゥリナとともに、ピョートル一世以来の、ロシアにおけるチュルク学者(言語・文献・歴史・文学)の伝記大辞典の編纂に従事中。二六歳の新進で、ブルガリヤに留学し、トルコ語・ドイツ語を良くする。イブラギモヴァ (Ибраимова Г.М.)—タリーヒラシーディー (Тарихи Рашиди)、および、東トルキスタン近世史の研究。ペトロシヤン—研究所所長、オスマントルコ史。ドゥリナ (Дурина Н.А.)—オスマントルコ史、とくに、一九世紀、タンズィマト時代史の研究。ソロウモフスカヤ (Соломоновская Л.В.)—現代トルコの作家・作品の研究。ヨリシヒ (Юриши И.И.)—ロシアにおけるモンゴル学史、とくに、後述の東洋学者アルビーフ所蔵の、モンゴル・カルムク・ブリヤート族に関するロシア語資料の研究。これは一九六六年中に出版の予定。ユングリヤド (Юнгларид Т.И.)—モンゴル年代記の研究。これは、後述の日本学者ユングリヤド (Юнгларид

B.H.)の夫人である。これらのほかに、アスピラントとして、アリイサ(Алиса III.)がいる。かれは、アゼルバイジャン人で、バクー大学の出身。ここ三ヶ年にわたり、本研究所でチュルク語方言、チュルク語史の研究に従事している。準博士^カの学位が得られれば、バクーに帰るはずになつてゐるという。

要するに、ここでは、その名はチュルクーモンゴル部門—研究室とはいふものの、チュルク学者が主流を占め、モンゴル学者はヨリシユ、ゴレグリヤド夫人の二人にすぎない。このうち、ゴレグリヤド夫人は未だ若く、パンクラトフ、プチコフスキイの引退後、その学業を継承しうるものは、ヨリシユただ一人というのが現状のようである。かつてベレジン、シュミット、カヴァレフスキイ、ゴルストゥンスキイ、ウラジミルツォフ、コズィンなどを擁してその隆盛をほこつたレニングラードのモンゴル学は、わずかに、レニングラード大学東洋学部モンゴル語学科(Кафедра монгольской филологии)に、その面影を残しているにすぎない、と言つて過言ではない。

これにたいして、チュルク学者はその数も多く、しかも、二、三人をのぞくと、あとは何れも二〇歳代から四〇歳代で、全体として非常に若く、さらに、その若さに似合わず、みなそれぞれ、すぐれた業績を出して、ソ連のチュルク

学において、メリオランスキイ、ラドロフ、サモイロヴィチ、ドミトリエフ、マローフなどの学統を継ぐものが、ここでも、続々と育つてきていることがうかがえた。

このチュルクーモンゴル部門—研究室では、各研究員の関心がそれぞれに異なつているため、部門—研究室としては、その研究題目を一つにしほすることはせず、三つ乃至四つの大きい題目に分け、各研究員がその何れかに関係ある研究に従事するという体制・方針をとつてゐる、ということであつた。¹⁴しかし、そのさし当つての重点が、さきに触れたように、当研究所所蔵のチュルク語、モンゴル語写本・文書目録の作成にあることは確かである。そしてこういう体制・方針は、何もこの部門—研究室に限つたわけのものではなく、他にあつても、およそこれと同じように見うけられた。¹⁵

チュルクーモンゴル部門—研究室の創設以来一九六五年にいたる間の、その研究活動について見ると、以下の如くである。¹⁶

(一)本研究所所蔵のチュルク語、モンゴル語写本・文書目録の作成。すべてに簡単な解説を附する。

(二)チュルク語・モンゴル語古典の研究、複製・出版。前述のクリヤシュトルヌイの著書もこの中へ入る。

(三)ヨリシユによる、ロシアにおけるモンゴル学史、とくに、モンゴル・カルムク・ブリヤート族に関するロシア語資

料の研究。これはすでに完成し、一九六六年中に出版の予定。

(四) ペトロシャン所長による、オスマン・トルコ史、とくに青年トルコ党、オスマン・トルコの大学・教育史の研究。

一九六六年から七〇年にいたる五ヶ年間の研究計画として、つぎのことが考えられ、実施中であるという。

(一) 一九五七―六五年の事業、とくに、その(一)と(二)との継続、なかでも、古代ウイグル語文書の目録の作成。これには、主としてトゥグシエヴァ女史が当る予定であるが、その完成には、少なくとも五、六年は要するであろう、という話であった。

(二) 一九一―二〇世紀、タンズイマートからトルコ革命にいたる、オスマン・トルコ文化史の研究。これは、ペトロシャン所長、ドウリナ、ソロコウモフスカヤ両女史が担当する。

(三) コノノフ教授、グーゼフ、ドウリナ女史の共同研究による、ロシアにおけるチュルク学者の伝記大辞典の編纂。

(四) クリシャシュトルヌイ、シチュエルバク、チエニシエフ、パトマノフの共同研究による、「ルーニ文字チュルク語碑文大系」の編纂。

以上が、チュルク・モンゴル部門―研究室の大要、研究者、研究状況の概略であるが、これらのはかに、キルギズ共和国科学アカデミー歴史学研究所(フルンゼ)の考古学者で、天山地方・ケンコール古墳群の発掘団長として有名なイスマン

(Кеван К.) や、アフガニスタン、北インド、中央アジア史の研究者ロモディン(Ромдин В.А.)も、この研究室へしばしば出入りしていたようである。

極東部門―研究室。そのほかわたしは、とくに極東部門の学者とよく話し合ったが、つぎに、そこでわたしの会った人々について簡単にのべておく。

中国研究室。メンシコフ(Меншиков И.Н.)——中国文学者で中国語を良くし、紅樓夢の翻訳などで我が国にも知られているが、ここ六年ばかり、研究所所蔵の敦煌文書の研究、目録の作成に当っている。その敦煌文書目録の第一巻がすでに出版されたことは周知の通りである。四〇歳。コロコロフ(Колорова В.С.)——中国語学・文学者で、コロコロフ式の漢字検索法を案出し、それを用いた華俄小辞典を編修・出版した。また、四書五経の研究と翻訳とに従事し、とくに、論語・孟子のそれは完成したが、或る事情から、出版できぬままになつてゐるという。そのかわり、西夏文書・文字の研究にも当っている。中国語を良くする。チュグエフスキイ(Чугуевский И.И.)——東洋学者アルヒーフ長をしていたが、ここ二年間は、敦煌文書から見た中国社会経済史の研究と、敦煌文書目録第三巻の編修に当っている。満洲育ちで、日本語を自由に読み、また話す。わたしは、林基氏を通じて同氏

から依頼のあつた、那波利貞博士の論文、「唐宋時代の社邑について」を持参してとどけた。

西夏研究室。クィチャノフ——前述の如く、本研究所副所長で、西夏文書・文字の研究者。

日本研究室。ペトロヴァ (Петрова О.И.)——かつてはレニングラード大学東洋学部日本語学科 (Кафедра японской филологии) の主任教授を兼任していたが、科学アカデミーの研究所の研究員と大学の教授との兼任が、特例をのぞいては許されなくなつたので (コノノフ教授の場合は、特例とのこと)、現在は研究所の専任で、古代日本語文法、方言の研究、日本語写本目録の作成に従つてゐる。しかし、一九六五年五月、怪我をして目下病臥中である。わたしは、後述するゴレグリヤドに案内されて同女史を自宅に見舞つたが、そのさいには、わたしが吉田金一氏から託され、ゴレグリヤドを通じて渡しておいた橋本進吉博士の著書をひもといておられた。ゴレグリヤド (Горегриад В.И.)——中世日本文学、とくに隨筆の研究。その準博士論文は徒然草の研究と翻訳とであるが、現在は、ペトロヴァ女史をたすけて、日本語写本目録の作成に専念している。また、同研究所から出版された「環海異聞」は同氏の研究にかかる。ソ連からの各種代表団の通訳として数度にわたつて来日したほか、漁業監視船の通訳をつとめたこともあり、その日本語は非常に流暢である。

批評と紹介 護

会話のみならず、日本文の草・行書をよく読みこなすことでも、レニングラード大学東洋学部日本語学科の主任教授ビーマス女史 (Пинус Е.М.) とならんで、レニングラード随一であらう。ニコラエヴァ (Николаева О.С.)——日本史、とくに五人組の研究。野村兼太郎博士の「五人組帳の研究」を熱心に読み、わたしは同女史から、非常に専門的な術語につき、いろいろ質問された。ハニン (Ханин З.И.)——日本史、とくに部落問題の研究。ほとんど毎日図書館に来ては、「図説部落問題Ⅰ、人間みな兄弟」を読んで、抜き書きをつくつていた。かれにも、極めて特殊な術語を幾つか尋ねられたが、わたしの貧弱な知識ではとても答えられぬものばかりで、畏友布目潮風教授を通じて、立命館大学の奈良本辰也教授に問い合わせた。三七歳で、日本史の研究歴は相当長い。部落問題に専念し出してからは一年そこそこしかならず、日本語の会話は決して上手とはいえない。しかし、「わたしはハニンです。ハニンではありません」くらいのごとは話せる。グロムコフスカヤ (Громыкина Л.В.)——現代日本文学、とくに中野重治の研究。モスクワ放送局のレニングラード駐在員をつとめ、日本向け放送の原稿の執筆にも当つてゐる。イヴァノヴァ (Иванова Р.И.)——近代日本文学の研究。立命館大学に留学したことがあり、目下、堺利彦の自伝の翻訳に當つてゐる。

以上、本研究所の研究部門のうち、わたしが主として出入りしたチュルクーモンゴル部門—研究室の概略、わたしが会った極東部門の学者たちについて、知りえたところをのべた。これらのほか、Ю.И.НАДАН СССР では、シリア史の研究者として有名なビグレンフスカヤ (Пигульская Н.В. 科学アカデミー準会員)、イブシールドゥーソンの研究者で、前述のクリヤシュトルヌイの夫人であるバツィエヴァ (Бацева С.М.)、イラン学者で、イラン語写本目録の作成に従事しているバエフフスキイ (Баевский С.И.)、ムグ文書の研究者であるリザシツ (Лизин В.А.)、さらには、本研究所と同じ建物にあるソ連科学アカデミー考古学研究所レニングラード支所 (Ленинградское отделение Института археологии АН СССР [Ю.И.НАДАН СССР]) の研究員で、西トルキスタン考古学の専門家ザドニェプロフスキイ (Заднепровский Ю.А.) などにも会い、いろいろ意見を交換したが、これらについては、ここでは詳しくはのべない。

研究報告会そのほか。本研究所の研究部は、前述のように、アジアの各地域毎の研究部門—研究室に分かれている。しかし、このような、地域別にかかわりなく、史料学 (Историческое языковедение)、歴史学 (история)、文学 (литературоведение)、言語学 (языковедение) という学問の専門別に分かれて、

この専門毎に各研究部門—研究室の研究者が集まり、大体二ヶ月に一回、研究報告会を開く。そのほか、一年に数回、研究所の全員が集合して、全体の研究報告会を開き討論する。丁度わたしがレニングラード滞在中に、一九六六年度の第一回の全体報告会が催されたが、ここでは、史料学部門で一〇名、歴史学部門で一〇名、文学部門で一三名、言語学部門で一四名のものが報告し、そのあとで、実に活潑な討論が行なわれた。聴衆は、必ずしも研究所員とは限らず、レニングラード大学そのほかから、多数の学者が参加し、討論にも加わっていたようである。

これら、研究所内部の研究報告会のほかに、「ズナーニエ (Знание「学問」知識)協会」(Общество «Знание»)主催の公開講演会にも、研究所として参加し、一ヶ月に一回、研究員が、ポピュラーな題目のもとに講演を行なっている。その目的は、「学問的研究および新発見、東洋諸民族の文化史、今日の東洋、東洋諸国のイデオロギー」について、啓蒙活動をするにあるという話であった。

写本保存室 (Хранилище рукописей)、とくに、そこに所蔵されている古代ウイグル語法律文書。写本保存室長ヴォルコヴァ (Волкова М.П.) は満洲語学者で、満洲語写本目録の作成に当たっているが、ここには同女史のほかに、チュルク学者

イヴァノヴァ (Иванова P.H.) がいて、ヴォルコヴァ女史と交替で、写本・文書の管理に当つてゐるようである。

この写本保存室に所蔵されている写本・文書のなかには、ピョートル一世が「タンストーカーメラ」に蒐集したものも入つてゐるが、その数は余り多くはない。ほかの大部分は、その後の各種探検隊の将来品、または購入したもので、全部で約四〇、〇〇〇点におよび、それらには、四六―七民族の言語が使用されているといふ。現在のところ、本研究所の研究が、これらの写本・文書を中心にして行なわれていることはすでに述べた。こういう状態は、今後相当長く続くことであらうと思われる。

前に触れたように、東洋文庫では、すでにラドロフ、マiprofによつて解説、発表された古代ウイグル語法律文書のマイクロフィルムの送付方を要請しておいたのであるが、これは、わたしのレニングラード到着の前後に、東洋文庫へ発送された。しかし、わたしは、ソ連におけるマイクロフィルムの技術について従来とかくの噂を聞いてもおり、文庫へ送られたものがどの程度鮮明であるか全く不明だったので、その原文書に直接當つて見たいと思ひ、それらを閲覧させてくれるよう、ペトロシャン所長に頼んでみたところ、快くこれに応じてくれた。そこで所長に案内されて二階の保存室へ行く、ヴォルコヴァ、イヴァノヴァ両女史が一包みの文書をと

り出してくれた。これが、東洋文庫へ送られた写真の原物であつた。それ以後わたしは、暇を見てはこれらを一々検討することにしたのである。

ところで写本保存室には、図書館の閲覧室へ直接通ずる職員用の出入口がついていて、保存室所蔵の写本・文書の類は、原則としては、保存室から閲覧室へ持ち出してもらつて、そこで調査、研究することになつてゐる。そのさい、その写本・文書は、閲覧室勤務の係員の名前で、保存室から一時借り出すという形をとつてゐるらしかつた。この閲覧室は、たゞまゑとしては午前九時半から午後五時まで開くことになつてはいるが、ここは、本研究所のみならず、これと同居してゐる考古学研究所レニングラード支所そのほかの主催する講演会などの会合にも使用され、午後から閲覧を停止されるのがたびたびであつた。それも、停止されることがせめて前日からでもわかつておればまだよいのであるが、朝行つて見て、閲覧室の戸口に張り出された掲示ではじめてそれと知る場合が――いや、そういう掲示さえもなく、閲覧中に突然追ひ出される場合も――あり、余り能率的とはいへなかつた。その上、わたしの本務は、「視察・講義・討論」にあり、「研究」ではなかつたので、そう毎日図書館へ通うわけにもゆかず、レニングラードに滞在した一ヶ月余りのあいだに、上述の、東洋文庫へマイクロフィルムとして送られた分

を検討するのが精一ぱりであった。

さて、われわれがマイクロフィルム化を要請しておいた古代ウイグル語法律文書は、この四四点であった。

(一) ロヂロフスキイ (Рожиковский В.И.) がエドゥンメンツ (Киевский Д.А.) がエッセルマンに蒐集した一四点。これは Radloff W.: Uigurische Sprachdenkmäler. Materialien nach dem Tode des Verfassers mit Ergänzungen herausgegeben von S. Malov, Leningrad, 1928 (略称: USP.) 所収の No. 47 から No. 60 までである。

(二) クロトコフ (Кротков Н.И.) がウナムチに蒐集した二一五点。これは USP. の No. 107 から No. 127 まで。また、Malov С.Е.: Памятники древнетюркской письменности, Москва-Ленинград, 1951 (略称: Малов 1951) 所収の法律文書 No. 2 (Юр. No. 2) までである。

(三) オルテンブルグ (Орденбург С.Ф.) がイディクートーシヤプリ、ムゼクリク、チクティムに蒐集した六六点。これは USP. の No. 98 から 116、Malov С.Е.: Уйгурские рукописные документы экспедиции С.Ф. Орденбурга, Ленинград, 1932 (略称: Малов 1932) 所収の No. 1 から No. 5 までまでである。

(四) ヲーロフがアスターナに蒐集した二点。これは、Malov С.Е.: Два уйгурских документов, Ташкент, 1927 (略称: Малов

1927) 所収の No. 1 と No. 2 とである。

これらのうち、(一)の一点点は、原文書も写真も残っていない。この一四点のなかで、USP. の Nos. 50, 56, 57, 58, 59, 60の六点は、マローフが調査したさいにすでに喪われていたらしく、そのことはすでにマローフがのべている。したがって、これらは口伝を得たとしても、そのほかの USP. の Nos. 47, 48, 49, 51, 52, 53, 54, 55 の八点は確かに残っているはずだと思ふ。イヴァノヴァ女史に再三尋ねてみたが、見当がぬという返事であった。

(二) の二点のうち、原文書の残っているのは、Malov 1951 所収の Юр. No. 2 だけで、USP. 所収の No. 107 から No. 127 までの二一五点、その写真だけしか残っていない。

(三) の六点のうち、USP. 所収の No. 98 は、原文書も写真も残っていないが、Malov 1932 所収の No. 1 から No. 5 までには、原文書が保存されている。USP. 所収の No. 98 は、マローフが調べたとき、すでに喪われていたらしい。⁽²⁶⁾

(四) の二点は、原文書が残っている。

要するに、ラドコフ、マローフによつて解説、発表された東洋文庫がそのマイクロフィルム化を依頼した四四点のうち、原文書の保存されているもの八点、その写真しか残っていないもの二二点で、残る一五点は、その原文書は勿論、写真もなきもの。

わたしは、これら原文書八点、および写真として残されているもの二一点、合計二九点を一つ一つ検討したあとで、これ以外の古代ウイグル語法律文書数点を調査しえたが、そのくわしい結果は別に発表する予定なので、ここでは省略し、ただ、レニングラードにおける文書の保存状況が、東ベルリンのそれに比べて非常に悪いことだけをのべるに止めておく。

ここに所蔵されている古代ウイグル語文書の目録は、クリヤシュトルヌイの話では、前述のように、トゥグシエヴァ女史の手で作成されることになっている由である。しかし、写本保存室のイヴァノヴァ女史や、モスクワのチュニシエフなどによると、マローフ亡きあと、古代ウイグル語文書を正しく解説できるものは、レニングラードにはいないのではないかと、ということであつた。トゥグシエヴァ女史はすぐれたフィロログで、前にも触れたように、古代チュルク語辞典の編纂にも当つているが、どの程度、文書解読能力をそなえているか、わたしにはわからない。とにかく、誰の手によつても良いから、この、二、三〇〇〇点にのぼるという古代ウイグル語文書の目録が一日も早く完成され、出版されることをのぞむのは、わたしだけではあるまい。

東洋学者アルヒーフ (Алхеев Александр Иванович)。これについて

批評と紹介 護

は、藤枝晃氏が「図書」(一九六六年一月号)に、吉田金一氏が「近代中国研究センター彙報6」(一九六五年)に、それぞれ書いておられ、わたしもまた、別の雑誌でこれを紹介するはずになつていたので、ここではただ、その一般的性格をのべるに止めておきたい。現在アルヒーフ長をつとめているヘルテリス (Beppepa Д.Е.) は、イラン・タジク・トルコ・アラブ学者として有名であつた故ヘルテリス (Beppepa Д.Е. 科学アカデミー準会員)の子息である。ここには、ピョートル一世の治世、一七一七年以後現在にいたる、ロシアの東洋学者の原稿、未出版草稿、日記、手記、写真、往復書簡そのほかと、主に一九世紀に東洋諸地域に在勤したロシア外交官の残した資料などが、ロシアにおける東洋研究史の材料として、整然と分類の上、保存されている。いまのところ、一二五人の学者のものを主体としているが、それ以外に、きわめて資料の少ない若干の学者のものもある。そのほか、アジア博物館・東洋学研究所・アジア諸民族研究所レニングラード支所の館長・所長あて、同図書館長あてに來た書簡も、年代別に分類して保存している、ということであつた。

要するに、ロシアの主要なる東洋学者に関する、その既刊著書以外の資料は、すべてここにそろつているわけで、これは、或る東洋学者の全集の編纂、ネクロロギーの執筆、ロシ

アにおける東洋研究史の編修などに、この上ない便宜を与えている。目下編纂、出版されつつあるバルトリド全集、ヨリシュが完成したロシアにおけるモンゴル学史、コノフ、グーゼフ、ドウリナ女史が共同で編修しつつある、ロシアのチュルク学者の伝記大辞典なども、これあるが故に、比較的容易にことが運ぶ、という話であつた。我が国にもかようなものがあれば、とは思ふけれども、いま早急にその実現をのぞむのは無理であろう。

図書館。館長のボルシチエフスキイ (Borshchik D. E.) はイラン学者。前述のように、この蔵書は、アジア博物館からうけつたものがその基本をなしており、総数約六〇万冊ということであつた。項目別カードに比べて、著者名別カードの方がよく整備されているように見うけられた。

この図書館と東洋文庫との図書の交換は、はじまつたばかりであつたので、具体的な交渉を少し行なつてきた。さきにも紹介したように、ここには、日本語を自由に読みこなす学者がかなりいる。日本学者はいうまでもないが、シナ学者でも、例えば、チュグエフスキイは、史学雑誌の「回顧と展望」は毎号読んでいて、日本の学界の事情には相当通じているし、メンシコフは、目下日本語を勉強中、ということであつた。また、日本語に通ぜぬものでも、必要な日本語の論文

は、日本学者にその大意を説明してもらつているようで、榎教授やわたしの日本語論文の内容を知つている学者が二、三いた。だからといつて、われわれが、その業績を日本語ばかりで発表していい、というわけのものでは決してなく、われわれは、われわれの得た成果を外国に紹介するのにもつともつと努力を払うべきである。ただここで指摘したいのは、日本の東洋学者の研究を、たとえ日本語で書かれたものであつても、ソ連の学者たちは非常に要求している、ということである。今後、両国間の図書——学者、研究者はいうまでもないが——の交換がさらに活潑になることをのぞんで、この紹介の文章をおわる。

最後に、わたしのレニングラード滞在中、なみなみならぬ好意をもつてわたしを世話し、いろいろ便宜をはかつていただいた、Ю ИНА АН СОСР 所長パトロシヤン、副所長クイチャノフ、チュルクキーモンゴル部門——研究室長クリヤシュトルヌイ、チュルク学者コノノフ、グーゼフ、中国学者メンシコフ、コロコロフ、日本学者ゴレグリヤド、図書館長ボルシチエフスキイ、アルヒーフ長ベルテリスそのほかの研究者、レニングラード大学東洋学部日本語学科主任教授ビーヌス女史をはじめとする同研究室の人々、同学部極東史学科主任教授イェフィモフ博士、ゼニーナ女史など、すべての方々、心からの謝意を表したい。(東京大学文学部助教)

注

- (1) そのほかの研究機関、大学についても、順次紹介するつもりである。
- (2) わたしはソ連滞在中、訪問する各機関、大学ごとに、「要覽」を要求したが、入手しえたのは、レニングラード大学の入学希望者用の手引きと、アゼルバイジャン共和国科学アカデミーがその二〇週年記念に出した要覽とだけであつた。
- (3) この項は、主として、極東部門、中国研究部のチャグエフスキイから得た情報と、Ливцова О.Э.: Вспомогательный отдел Азиатского Музея и Института востоковедения Академии наук СССР (1917-1958), Очерки по истории русского востоковедения, сборник ш, 1960, стр. 196-197 の記述に拠つた。
- (4) これについては、Струве В.В.: Советское Востоковедение за сорок лет, Ученые записки Института востоковедения, том XXV, 1960, стр. 7 参照。
- (5) これは、チャグエフスキイの言である。
- (6) ソヴィエト連邦の学者のなかには、いまでも、不用意に「東洋学研究所」という名前を使うものが多い。
- (7) ДЮ ИНА АН СССР 所長ハトロシヤンの言に拠る。
- (8) ИНА АН СССР のモスクワ本部の言語部門日本語科

批評と紹介 護

のヴァルドゥーリ (Вардуль И.Ф.) の言に拠る。

- (9) アスピラントは大学のほかに、科学アカデミーの各研究所、各博物館の研究部にも在籍して、研究に従う。しかし、アスピラントだけに行なわれる特別の講義はないようである。期間は三年で、その間にカンディダート(кандидат 準博士)論文を用意する。
- (10) これは、チャグエフスキイの情報に拠る。
- (11) Кононов А.Н.: Тюркологи в Ленинград (1917-1957), Ученые записки Института востоковедения, том XXV, 1960, стр. 284.
- (12) これは、クリヤシネトルヌイの言に拠るが、前註にあげたコノノフの文章では、一九五六年のことのようにもうけとれる。Ibid, стр. 289.
- (13) レニングラード、モスクワにおけるアルタイ学、とくにチュルク学については、別に発表する一文を見られたい。
- (14) クリヤシネトルヌイの言に拠る。
- (15) Меншиков, Чугуевскииに拠る。
- (16) クリヤシネトルヌイの言に拠る。
- (17) 同上。
- (18) レニングラード大学東洋学部日本語科主任教授ビースヌ女史の言に拠る。

(19) わたしの帰国後も、ソ連労働組合代表団の通訳として来日した。

(20) わたしが Ю ИНА АН СССР で行なつた講演も、それが通訳してくれた。

(21) わたしがレニングラード滞在中に、イタリーから帰国した。イタリーではパチカンの図書館で研究に従事していた由。

(22) 以上の記述は、主に、イヴァノヴァ女史から聞いたことに基ずいている。

(23) ただし、特別の事情があれば、各研究室まで持ち出すことも可能であるようであつた。

(24) Usp. S. VII, Ann. 1.

(25) Ibid.

(26) これについても、別にのべるはずである。

(27) レニングラードで、目下、ウイグル文書について研究しているのは、ソ連科学アカデミー人類学・民族学研究所のティホノフ (Тихонов Д.И.) だけである、しかし、わたしが会つて話した限りでは、同氏は、Ю ИНА АН СССР の所蔵文書は、ほとんど見ていぬようであつた。

(28) わたしの Ю ИНА АН СССР での講演後、まず出た要求は、日本の東洋学者は、少くとも英語で、その業績を発表してほしい、ということであつた。

比較社会構造論

——アメリカから見た

アジア史の把え方——

市川健二郎

比較社会構造論がアメリカにおけるアジア史の把え方のすべてを意味するものではない。しかし私が在米中(一九六三—一九六五年)に知り得た限りではこの考え方がアメリカにおけるアジア史の底を流れる最も重要な方法論のひとつであり、またアメリカにおけるアジア史の研究方法に大きな影響を与えている考え方もある(例。E. O. Reischauer, J. K. Fairbank, H. J. Benda, I. Krader)。

私はここでこの理論に関する五つの問題を説明したい。それらの問題は(一)なぜ、またどのようにしてこの理論がアジア史の研究方法の中へ取入れられたか。(二)アジアの社会間あるいは国家間でなぜ近代化の速度に差を生むのか。伝統的背景の追求はこの問題解決にどの程度貢献できるか。

(三)問題解明のために政治史、経済史、社会史、文化史、のどのような有効なまた利用し得る史料を選ぶことができるか。(四)アジアの社会間あるいは国家間の比較研究に取組